

CAGLIERO 11

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.133 - 2020年1月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



私

私たちは最近、2019年12月8日付の総長の宣教の呼びかけを目にし、耳にしました (<http://www.infoans.org>)。第151回宣教派遣は惜しみなく応じる候補者を待っています。その宣教師たちは、2020年9月27日、日曜日、ヴァルドッコから派遣されます。

「私は大きな熱意と強い確信をもってこの宣教の呼びかけを行います」とドン・ボスコの後継者は、すべての若い会員、「またあらゆる年齢の会員」に呼びかけました。

カリエロも、ファニャーノやコスタマニャーナ、カラヴァリオ、ヴェルシリア、チマッテイも、また最近派遣されたばかりの実地課程生たちも、皆、すべての人へ ad gentes、故国を出て外へ ad exteros、生涯をかけて ad vitam 派遣された宣教師です。あなたも自分の名前を加え、このリスト、この使命を続ける心の準備ができていますか。

その本質は、耳を傾けるようにという招きです：神の呼びかけに耳を傾けること。なぜなら、この特別な召命へと呼びつづけるのは主であるからです。まず主と一致して、はじめてこの宣教の呼びかけに耳を傾けることができるのです。それは識別へと続く傾聴、心の中で、本当に神に耳を傾けることです。

したがって、よく聞き、よく識別することです。よく応えることができるように。つまり、惜しみなく応えることができるように。

アンヘル神父は次の言葉で締めくくっています：「耳を傾けるよう招きます。皆さんのために祈っています。皆さんの手紙を待っています。」

宣教師顧問 ギジェルモ・バサニエス神父

サレジオ宣教の日2020

今年、2015年から2020年の6か年が締めくくられます。この6か年はサレジオ・ミッションのさまざまな場における第一次福音宣教というテーマが中心となりました。オセアニア(2016)、アメリカ大陸(2017)、アジア(2018)、アフリカ(2019)に焦点を当ててきましたが、2020年は、私たちのオラトリオやユースセンターを通して、ヨーロッパにおいてイエス・キリストを宣べ伝える第一次福音宣教にささげられます。

オラトリオは、宣教への熱意をもって行う、児童と青少年のための教育事業である(会則第11条)。この典型的なサレジオ事業の教育的、宣教的な力は、かつてもそうであったように、今日も、ヨーロッパの若者のために生き生きとした意味深い宣教プログラムを提供します。それぞれの地域の若者の世界に開かれた、外へと出向いて行くオラトリオ・教会、私たちの愛する主を若者も愛するよう、若者が愛するものを愛するオラトリオです。

今年のサレジオ宣教の日は、子ども、思春期の若者、青年たちと出会う基本的な方法として、ドン・ボスコ独自のこの事業に心して取り組むよう、全五大洲の各管区を力づけたいと願うものでもあります。私たちは創意工夫豊かな司牧奉仕の無償性、自由、家庭的雰囲気うちに、主が私たちと出会わせてくださるすべての子ども・若者と知り合い、共に歩み、教育し、イエスの良い知らせを告げます。「ドン・ボスコは、最初のオラトリオで典型的な司牧体験を積んだ。このオラトリオは、青少年にとって、迎え入れてくれる家、福音化の行われる小教区、人生に備えさせてくれる学校、友人としてふれ合い、快活に生きることを学べる運動場であった。現代においてわたしたちが使命を遂行していく上で、このヴァルドッコ体験は、あらゆる活動と事業を識別し、刷新していく恒久的規範となる。」(会憲第40条)

サレジオ宣教の日2020は主の御公現の祭日に告知され、11月11日前後の週に祝われます。会の宣教の炎を生き生きと保たせることを目指します。主がすべてのサレジオ会員とサレジオ家族の信徒に、今日の若者のためのオラトリアン-宣教師の心を与えてくださいますように。



アゼルバイジャンの小さな群れ



私は当時、社会主義の国であったチェコスロバキアに生まれました。子どものころから、司祭にそして宣教師になりたいと思っていました。宣教師の話を聞き、何冊かの本や記事を読んだりしていたのです。宗教を信じない人や自分の宗教を実践していない人たちとの出会いは、私の召命の識別に重要な役割を果たしました。実地課程やイタリアで神学の勉強をした時期の体験は、とても大切な経験になりました。宣教師志願の正式な申請を出す決定的な後押しとなったのは、人々にとって神の子イエスを知ること、教会を共同体として体験することが実際に難しい所であればどこでも奉仕したいという、自分自身の気持ちだったと思います。

私はヨーロッパとアジアの間に位置するアゼルバイジャンに8年暮らしています。アゼルバイジャンは、かつてソビエト連邦に所属していた、世俗社会に

多文化が共存する国で、あらゆる宗教に寛容です。私が前にする挑戦は、東洋的な背景のある、主にイスラムの、さまざまな文化を持つ人々の中で暮らすことです。また、典型的なカトリックの環境から地理的に遠く離れていることも、私にとって大変です。この国の人口は1千万人ですが、そのうちカトリック信者はたったの300人です。約600人の外国人も、毎週来る人もそうでない人もいますが、日曜日や祭日にミサにあずかります。サレジオ会にゆだねられたたった一つの小教区が唯一のカトリック教会です。幸い、マザー・テレサの姉妹たち(神の愛の宣教師会)や、サレジアン・シスターズもいます。しかし最大の挑戦は、私自身の限界です。私たちの共同体も限界があります。私たちはたった8人のサレジオ会員、そのうち一人はこの国の司教です。

それでも、多くの喜びがあります。外から来る喜びの中で最も大きかったのは、言うまでもなく2016年の教皇フランシスコの訪問、この国で教皇が初めてささげたミサ、私たちの共同体の最初の院長、使徒座知牧長の司教叙階です。しかし最高の喜びは、イエスへの信仰の賜物を受けた人々が自然に吐露するあかしです。そのうちのあるあかしは私にとって非常に意味深いものでした。私は教会の一人の信者と一緒に、コーカサス山脈のふもとの村を訪れていました。信者の友人、プロテスタントの人に会いに来たのでした。私たちは毎日共に祈り、晩には神のみ言葉の体験を分かち合いました。ある日、村全体を見下ろすすばらしい眺めのある丘に登ったとき、我々の宿主は歌い出し、神を賛美しはじめました。彼は目に涙を浮かべていました。彼は声に出して問いかけました、なぜこれほど多くの人々の中で自分の家族だけがキリスト者となる恵みをいただいたのだろうか。その瞬間、私はとてつもなく大きな喜びを感じました。私がただアゼルバイジャンにいることをも通して、神は選ばれる人々をもっとご自分の近くに引き寄せたいと望んでおられるのだと。

宣教師として生きるよう呼ばれているか識別を行っている兄弟会員の皆さんにあいさつを送ります。この賜物を、どのように見分けたらよいのでしょうか。それが何であれ、神のみ旨に心を開く必要があると思います。可能性や限界を持つ、ありのままの自分であることを学ぶ必要があります。同時に、あらゆる期待・想定は故郷に残していくべきです。最後に、たとえ人々が私たちと全く異なるとしても、すべての人を兄弟姉妹として迎えるよう、神は私たちを招いておられます。神は、罪人である私たちのただ中に来たいと望んでおられます。私たちを友、天の国の同朋とするために。

スロバキア出身、アゼルバイジャン、バクーの宣教師 **ヴラディミール・バシャ**



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 **ピエルルイジ・カメローニ** 神父

福者ティトゥス・ゼマン(1915 - 1969)。ゼマン神父は不当に投獄され、拷問を受け、有罪を宣告され、13年の長きにわたり厳しい監獄生活を送りました。その後、常に監視され、司祭、教育者としての召命を十分に果たすことを阻まれました。ゼマン神父は司牧者の模範です。心の深みにおいて、また社会生活においても、キリストにより近しく従うことが不可能だった若者たちのため、自らの人生をささげ、与えることができました。「常にドン・ボスコのスタイルで行動しよう、そうすれば人々もついて来る」というゼマン神父のメッセージは、現代も意味深いものです。

平和を広めるために

サレジオ家族は、紛争の絶えない多くの地域で、平和のために働いています。

キリスト者、ほかの宗教を信じる人々、すべての善意の人々が、平和と正義を広めますように、祈りましょう。



サレジオ会の宣教の意向

